

第2章 存在2

「もくもく」と歩んだ道のり

もくもくランドは、登米市合併前の旧津山町時代から地域の人たちと共に歩んできました。その歴史と果たしてきた役割とは。

新しい地場産業で町の活性化を

1982年のもくもくハウスオープン時に、津山町職員として林業振興を担当していました。

「もくもく」の原点は当時の佐々木一郎町長の「自らの知恵と努力で新しい地場産業を興す以外に町の活性化を図る道はない」との信念。スギなどの山林資源を、素材から加工製品まで町内で生産するとの方針を打ち出したことが始まりでした。

もくもくハウスの建設場所は、交通の便が良い国道45号線沿いに整備されました。

「もくもく」の愛称に込めた思い

「もくもく」という愛称は、9町が合併して登米市となった今でも、津山町の代名詞になっています。「もくもくハウス」という名前はオープンに先立って公募しました。採用されたのは当時、津山中2年の女子生徒。「木」と「木」で「もくもく」ですが、津山町民が過去の苦難の歴史を「黙々」と自力ではい上がってきたイメージにも重なり採用されました。



津山町石見 佐藤 賀津雄さん

1955年生まれ。74年に津山町役場に入庁し、81年からは産業課で農業や林業を担当。もくもくランドの立ち上げ業務などに従事する。退職後、2014年から4年半、道の駅津山「もくもくランド」の駅長を務める。

都市と山村の一大交流拠点として整備

「津山の顔」として誇れる拠点到

木材資源を軸に工芸の町づくりを目指して事業を推進した結果、東北工業大学との共同研究で開発した矢羽木工芸品の展示販売場としても全国的な知名度を増していき、オープン当初から多くの人でにぎわったのです。視察の依頼も全国からあり、多い時には年間3千人ほどの視察を受け入れたこともありましたが、売り上げが好調だったもくもくハウスは、出品数が増えて家具類も販売するようになると、店舗が手狭に

なってきました。また、敷地内で野菜の無人販売をしていましたが、出品希望者が増えたことと、ワサビやイワナなどの地元食材を使った食堂も併設したいという考えから、施設を整備し、現在の「もくもくランド」の形になりました。

もくもくランドは94年に建設省の「道の駅」に指定。県内では七ヶ宿町に次ぐ2番目の道の駅です。都市と山村を結ぶ一大交流拠点を目指して整備が進められてきたもくもくランドが、名実ともに「津山の顔」として誇りうる拠点となりました。

- もくもくランドの主なあゆみ
- 1982(昭和57)年 6月 クラフトショップ「もくもくハウス」オープン
 - 8月 矢羽集成材考案
 - 1984(昭和59)年 7月 常陸宮殿下同妃殿下がもくもくハウスを視察
 - 1986(昭和61)年 7月 もくもくランド建設開始
 - 1988(昭和63)年 7月 間伐材流通合理化センター現物産館、高齢者加工活動施設オープン
 - 1989(平成元年)年 10月 郷土文化保存伝承館オープン
 - 1990(平成2)年 7月 もくもくランド完成
 - 8月 皇太子殿下(現天皇陛下)行啓
 - 1991(平成3)年 6月 食事処「木里口(きりくち)オープン
 - 1994(平成6)年 7月 もくもくランドが建設省の道の駅「津山指定宮城県で2番目」
 - 2003(平成15)年 10月 もくもくハウスがリニューアル、産直センター「産直・ときめき野菜」オープン

地場産業が地域のカタチ変えた好事例

「一村一品運動」を津山町で展開

もくもくランドとの付き合いは、1978年までさかのぼります。きっかけは、私が県の工業技術センターに勤めていた時に、津山町長だった佐々木一郎さんが「地場産業で地域活性化を目指したい」と、技術センターに相談に来られたのです。

その頃は、大分県で「一村一品運動」といった地場産業を推進する取り組みが行われ、全国的に機運が高まる中で、県も佐々木町長の提案を後押しさせてもらうことに。津山町は戦後の植林でスギが多くありましたが、スギの木工芸品を使った町おこしをする方向で自然と話は進んでいきました。

木工芸品を作るにはそれに伴った技術が必要ということで、当時、東北工業大学で全国の木工芸品づくりを支援していた時松辰夫さんに講師を



東北工業大学 連携アドバイザー 佐藤 明さん

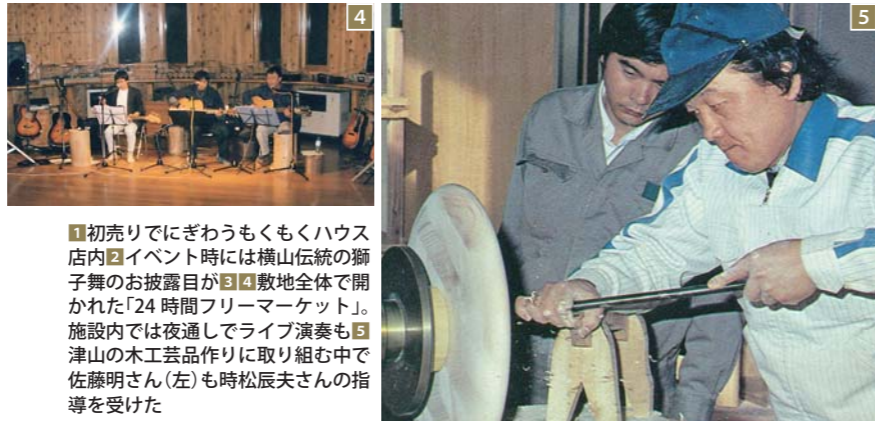
1949年生まれ。71年から宮城県職員として工業技術センターで地域産業振興やデザイン振興業務を担当。産業技術総合センターを経て、2008年から東北工業大学地域連携センターで、地域連携や産学連携などの業務を担当する。

依頼しました。その時の時松さんの教えが、今の津山町の質の高い木工芸品の原点です。当時としては珍しく、塗りや乾燥の工程を大事にするなど丁寧な工法で、形だけでなく質にもこだわりのありました。

矢羽はどのように生まれたのか

今、津山の木工芸品の象徴にもなっている矢羽集成材を考案したのも時松さんです。矢羽は見た目のデザイン性はもちろんですが、つなぎ合わせて作ることで大きな木がない状況でも家具などの大型商品を作ることができます。

津山のスギは、性質上成長が早く効率的な建築材として利活用が多い反面、年輪の粗さが弱点。シンプルでデザインが求められる家具や小物にとってはデメリットでしかありません。しかし、その粗さを生かし矢羽模様の集成材にすると、はつきりとした模様を出すことができました。ま



1 初売りにぎわうもくもくハウス店内 2 イベント時には横山伝統の獅子舞のお披露目が 3 敷地全体で開かれた「24時間フリーマーケット」。施設内では夜通しでライブ演奏も 4 津山の木工芸品作りに取り組む中で佐藤明さん(左)も時松辰夫さんの指導を受けた

さに、デメリットをメリットとして生かす技法といえます。

矢羽に学びピンチをチャンスに

昔は都会に出稼ぎへ行く人も多かったようですが、地元でモノを作る技術ができたことで地場産業に成長し、その必要もなくなっていきました。木工芸品が地域の産業を変え、家族のカタチ、地域のカタチを変えた素晴らしい事例だと思います。

当時の佐々木町長は、常々「地域づくりは人づくり」という話をされてきました。今は後継者不足といった問題もあるかと思いますが、高い技術を継承し、もくもくランドが地元から愛され続けることを願っています。かつて津山杉のデメリットを矢羽集成材というメリットに変えたように、このピンチをチャンスに変える力がこの地域の人たちにはあると信じています。



1982年にオープンしたクラフトショップ「もくもくハウス」